

都留文科大学電子紀要の著作権について

都留文科大学電子紀要のすべては著作権法及び国際条約によって保護されています。

著作権者

- 「都留文科大学研究紀要」は都留文科大学が発行した論文集です。
- 論文の著作権は各論文の著者が保有します。
- 紀要本文に関して附属図書館は何ら著作権をもっておりません。

論文の引用について

- 論文を引用するときは、著作権法に基づく引用の目的・形式で行ってください。

著作権、その他詳細のお問い合わせは

都留文科大学附属図書館
住所: 402山梨県都留市田原三丁目8番1号
電話: 0554-43-4341(代)
FAX: 0554-43-9844
E-Mail: library@tsuru.ac.jp

までお願いします。

[電子紀要トップへ](#)

「魔術的リアリズム」についての研究

A Study of "Magical Realism"

依藤 道夫

YORIFUJI Michio

Summary

This paper is a study on "Magical Realism", which is a term originally used by Franz Roh, a German critic of art and historian. The term gradually came to be used for literature, especially for Latin American literature. We now use it when we discuss and think of Latin American authors (novelists) such as Alejo Carpentier, Gabriel García Márquez and Carlos Fuentes, etc. But we can also study authors of other areas like William Faulkner and James Joyce, etc., through this "Magical Realism".

What we treat in the field of "Magical Realism" is the mixture of realism and non-realism (fantasy). In literature it is thus a new term, not old, as Professor Vera Kutzinski of the Department of English of Yale University says. It is not so easy to define this term very clearly. It is at the same time comprehensive and specific in its meaning.

This paper discusses what "Magical Realism" is both in meaning and historically and how it works especially in Gabriel García Márquez's *One Hundred Years of Solitude* and William Faulkner's *Absalom, Absalom!*, etc.

The final aim is to make clear what the "Magical Realism" authors could do and how they did it. Indeed, "Magical Realism" seems to be one of the most effective and worthiest way of writing for authors to describe the deep truths of modern complicated human society.

1.

「魔術的リアリズム」(Magical realism)なる用語(term)は、主としてラテン・アメリカ文学に関して用いられている。が、それは、同時に、ラテン・アメリカ文学の領域を越えて使用される批評用語でもある。分かりやすく言えば、同語はキューバのアレホ・カルペンティエーエ(Alejo Carpentier, 1904 - 80)、コロンビアのガブリエル・ガルシア・マルケス(Gabriel García Márquez, 1928 -)、チリーのイザベル・アレンデ(Isabel Allende, チリーの暗殺されたサルヴァドル・アレンデ大統領の姪)やカルロス・フエンテス(Carlos Fuentes, 1928 -)らのラテン・アメリカ文学と同時に、ウィリアム・フォークナー(William Faulkner, 1897 - 1962)やジェームズ・ジョイス(James Joyce, 1882 - 1941)らの他地域の文学についてもまた適用される用語なのである。

「魔術的リアリズム」は必ずしも「学説」(theory)、「学派」(school)といったものではない。それはポスト・コロニアル(postcolonial)な範疇のものであり、1980年代初期に盛んに論じられるようになったものである。

イエール大学 (Yale University) のヴェラ・クチンスキー教授 (Professor Vera Kutzinski) の筆者に対する説明によると、「魔術的」(magic) とは「人にとってなじみのないもの」(something not familiar to one)、「超自然的 (なもの)」(supernatural (thing)) にかかわる言葉である。同教授によると、「魔術的リアリズム」なる用語は、歴史的分野からの借用物であり (borrowed from history field)、「文学においては新しい、古くはない」(new in literature, not old) ものである。既述のように、ラテン・アメリカ文学が広く知られて来て以来のものなのである。ラテン・アメリカで流行し、北米へも入って来た次第である。更にインドやオーストラリアなどの文学についても応用されて来ている。

「魔術的リアリズム」は、もとはドイツの美術批評家、歴史家のフランツ・ロー (Franz Roh) が用いた美術史上の用語であった。それは1930年代、40年代を通して広まり、40年代にベネズエラのアルトロ・ウスラル=ピエトリらにより、ラテン・アメリカ文学独自の性格を表すために使われ始め、1950年代~60年代に好んで用いられるようになった。

ヨーロッパでは、とりわけフランツ・カフカ (Franz Kafka, 1883-1924) の『変身』(Metamorphosis, Die Verwandlung, 1915) に魔術的リアリズムらしさがあるとされるが、カフカの頃にはまだ「魔術的リアリズム」なる概念は出来上がっていなかった。もっとも、クチンスキー教授は、『変身』は「魔術的リアリズム」そのものとは言えない、と言う。また、「カフカは簡単なしろものではない」(Kafka is a tough thing) とも。

因みに、L・P・ザモラ (Lois Parkinson Zamora) とW・B・ファリス (Wendy B. Faris) は、こうした経緯を両者の共編になる『魔術的リアリズム 理論、歴史、社会』(Magical Realism Theory, History, Community, 1995) の中で、次のように説明している。

我々はこの本を4部に分けた。即ち、^{ファンダメンタル}基礎、^{セオリー}学説、^{ヒストリー}歴史、^{コミュニティ}社会である。最初の部には魔術的リアリズムの概念を発展させる上で特に影響力のあった2人の作者によって1927年、49年、そして75年に出版された論文を含めている。その2人とはドイツの美術批評家、史家のフランツ・ローとキューバの作家アレホ・カルペンティーエである。ローとカルペンティーエは、魔術的リアリズムの理論と実践において枢要となった2つの事項、即ち、不実在と土着性を明確にしている。ローは、現実と想像物の商(係数)について、更に詳しくは、ヨーロッパの1920年代のポスト表現主義者たちの絵画における対象物の位置づけについて考察している。カルペンティーエは、ラテン・アメリカの現実と想像界の特別な親近性を仮定している。カルペンティーエは、この経験を"lo real maravilloso americano"と呼んでいるが、それはアマリル・チャナディが彼女の論文の中で「カルペンティーエの『想像物の地域化』」として言及することになる言葉と概念であった。ローの力点は審美的表現に置かれており、カルペンティーエのは文化的、地理的アイデンティティーにあった。彼らの異なる見方にもかかわらず、ローとカルペンティーエは、魔術的リアリズムが時代やメディアの包括的な活用に関する修正的な立場を明らかにしているという信念を共有しているのである。2人とも、表現上の実在するが疲弊した様式に対する解毒剤とみなすものを議論する考えを用いている。我々はまた、エンジェル・クローレスとルイ・レアルによる初期の、広く引用されたラテン・アメリカの魔術的リアリズムに関する文学批評研究も含めている。

ロイ・パーキンソン・ザモラ&ウェンディ・B・ファリス共編『魔術的リアリズム 理論、歴史、社会』(*Magical Realism Theory, History, Community*, Ed. with an Introduction by Lois Parkinson Zamora and Wendy B. Faris)(拙訳)

「魔術的リアリズム」なる用語自体は、欧米の人たちが使い始めた言葉であるが、この種の文学は、カリブ海沿岸世界で始まった。欧米人は、ヨーロッパのモダニズムの観点からラテン・アメリカ作家と彼らの文学を眺めて「魔術的リアリズム」と呼ぶようになったのであるが、これは小説 (novel) 中心で言うことが普通である。そしてナサニエル・ホーソン (Nathaniel Hawthorne, 1804 - 64) やリチャード・チェース (Richard Chase) などにより、アメリカ文学 (小説) について言及されるあのロマンス論は、魔術的リアリズム論の先駆 (precursor) に当たるとも言える (クチンスキー教授)。いわゆるN・ホーソンの、R・チェース的な意味でのアメリカ・ロマンティシズムと魔術的リアリズムとは互いに通ずるところがあるということである。ともに新大陸世界 (新世界) という共通の土壌の上にあるからということでもあるであろう。

ともかく、この魔術的リアリズムなる用語には、どこか"political"な側面もあり、この種の小説を読む際、読者は、取り組み方というか、姿勢の改変を迫られるのである。欧米の従来の古典的小説に対する接し方をもってするなら、戸惑いを覚えざるを得なくなるであろう。

2.

魔術的リアリズムとは、現実性 (日常性) と想像的世界 (非日常性、幻想性) の共存した、それらの融合した状態をいうのであるが、この種のラテン・アメリカ文学作品においてはメキシコの作家ジュアン・ルルフォ (Juan Rulfo, 1918 - 86) の『ペドロ・パラモ』 (*Pedro Páramo*, 1955) も先駆の一つと言われている。同書のグローヴ・プレス (Grove Press) 版の序文 (Foreword) において、スーザン・ソントグ (Susan Sontag, 1933 -) は次のように述べている。

ルルフォの小説は、20世紀世界文学の傑作の一つであるのみならず、同世紀の書物で最も影響力のある一つである。実際、それが過去40年間のスペイン語の文学に与えたインパクトの強さを今以上に評価することはむずかしいであろう。『ペドロ・パラモ』は、真の意味で、古典である。それは、振り返ってみると、どうしても書かれざるを得なかったかの如くに思える書物である。それは文学の成り立ちに深く影響を与え、他の書物の中に共鳴し続けている本なのである。

スーザン・ソントグ (Susan Sontag) (J・ルルフォ作『ペドロ・パラモ』(Grove Press) の序文) (拙訳)

ソントグ女史もこの作品の影響力の強さを強調しているが、同じグローヴ・プレス版本の表紙に記された紹介文中にも次のような主張が見られる。

ルルフォの生き生きとした感覚的イメージ、激しい情熱、それに不可解な魔術のうっ

とりさせるような混合物、つまり「魔術的リアリズム」として知られるようになった作風であるそうした混合物は、あとに続くラテン・アメリカの作家たち、ホセ・ドノソ (José Donoso)、カルロス・フエンテス (Carlos Fuentes) からマリオ・ヴァルガス・リヨサ (Mario Vargas Llosa) やガブリエル・ガルシア・マルケス (Gabriel García Márquez) に至る作家たちに深い影響を与えた。

『ペドロ・パラモ』(Grove Press) 中の紹介文 (拙訳)

一方、ヴェラ・クチンスキー教授は、「魔術的リアリズム」の分野における諸作品の重要度順に関しての筆者の問に答えて、次の4作品を挙げている。

ガブリエル・ガルシア・マルケス 『百年の孤独』(*One Hundred Years of Solitude, Cien Años de Soledad*, 1967)

イザベル・アレन्द 『精霊の家』(*The House of the Spirits, La Casa de los Espiritus*, 1982)

カルロス・フエンテス 『アウラ』(*Aura*, 1962)

アレホ・カルペンティーエ 『この世の王国』(*The Kingdom of This World, El Reino de Este Mundo*, 1949)

このうちカルペンティーエの作品が最も初期の作品 (the earliest work) である。また、ノーベル文学賞受賞作家 (1982年) のガルシア・マルケスの『百年の孤独』が「魔術的リアリズム」を駆使した最大の作品であることがここに示されているわけである。

V・クチンスキー教授は、他にも、ジャマイカ出身のエルナ・ブロードバー (Erna Brodber, 1940 -) の『ルイジアナ』(*Louisiana*, 1994)、トリニダード・トバゴ出身のロバート・アントーニ (Robert Antoni, 1956 -)、クチンスキー教授の知己で、マイアミ大学 (The University of Miami) で創作を教えている の『ディヴィナ・トレイス』(*Divina Trace, a Novel*, 1992)、ポーリン・メルヴィル (Pauline Melville) の『腹話術師の物語』(*The Ventriloquist's Tale*, 1997)、更にミシシッピのノーベル賞作家ウィリアム・フォークナー (William Faulkner, 1897 - 1962) の『アブサロム、アブサロム!』(*Absalom, Absalom!*, 1936)、やはり同賞作家トニー・モリソン (Toni Morrison, 1931 -) の『ベラヴド』(*Beloved*, 1987) などにも「魔術的リアリズム」の観点からの深い関心を寄せている。

3.

幻想的リアリズムとも説明し得る「魔術的リアリズム」の手法による文学世界は、カリブ世界的特質、科学と宗教の異様な混合、魔術、ヴードゥー教 (Voodoo)、錬金術、神秘主義や民話、伝説、神話、反乱や内乱、奴隷制度、一族・家族や近親相姦、ミセジェネーション等々の諸要素にいろどられている。土着性が色濃く、現代生活と迷信や神秘の世界が入り混じり、しばしば現在と過去が混在、或いは融合している。

19世紀のアメリカ合衆国西部の文学に地方色豊かで滑稽なtall tale (ほら話) の流れがある。文豪マーク・トウェーン (Mark Twain, 1835 - 1910) などその系統上の作家であ

るが、「魔術的リアリズム」のよくするほらや大言壮語振りは、しばしばtall taleのそれら
の比ではない。むしろ壮大でさえある。或いはまた、「魔術的リアリズム」の特徴の一つ
である超自然現象活用の手法などは、強引で思い切りのよいものである。ガルシア・マル
ケスの『百年の孤独』は、既述の通り、この種の作品の最大の好例であるが、マコンド
(Macondo) 村のブエンディア (Buendía) 一族の100年にわたる興亡の過程を描いたもの
である。作中、たとえば冒頭近くに、ホセ・アルカディオ・ブエンディアに槍で殺された
ブルデンシオ・アギラルの亡霊が登場する場面がある。この亡霊は水を求めて家の中を歩
き回ったり、鍋のふたをあけたり、更に自分の傷口を洗ったりする。ホセは亡霊をどなり
つけるが、亡霊は一向に徘徊をやめようとはしない。結局、ホセのほう折れて、妻子や
仲間を連れて村を出てゆく。流浪の旅に発つのである。更に、金の倍加法の話もある。ま
た、毛の生えた軟骨の尻尾を持って生まれた子供も出てくる。更には、アウレリャノ・ブ
エンディア大佐には特殊な予知能力がそなわっている。同じ作者による長編『族長の秋』
(*El Otoño del Patriarca*, 1975) 中の独裁者は百才代~二百才代という現実離れた年令で
ある。やはりガルシア・マルケスの短編『土曜日の次の日』では、沢山の死鳥が空から降
って来たり、果実を積んだ「140輛」の貨車が通っていたりする。...このように奇想天涯
なことが次々と起こるが、余りに堂々としかも早いテンポで物語が進行してゆく中で、終
には読者は、何が語られようとももはや驚かない、という風である。そこには、ある意味
では、ダニエル・デフォー (Daniel Defoe, 1660 - 1731) の例の"make believe"の手法に通
ずるものが確かに見て取れるのである。『疫病流行年の日記』(*A Journal of the Plague
Year*, 1722) や『ロビンソン・クルーソーの生涯と冒険』(*The Life and Adventures of
Robinson Crusoe*, 1719) などにおけるデフォーの手法である。この場合は、事実(と思わ
せる)詳細を綿密に積み重ねてゆき、終には読者はそれを信じざるを得なくなる、という
例のデフォー流独自の書き方である。ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882 - 1941)
などによりリアリズム小説(ノベル, novel)の源流ともみなされるダニエル・デフォーは、
単に18世紀的英国合理主義の領域において現実とフィクションの狭間を狙っているのみで
あるが、「魔術的リアリズム」文学の場合には、一見、現実界と想像界の乖離が激しいよ
うに見えて、実はそうでもない。つまり、カリブ海沿岸を含むラテン・アメリカ世界にお
いては、非日常性や幻想性が現実生活と一体化しているという側面があるのである。既に
超自然現象やその他の例など挙げたが、同世界においては、驚異的なことさえ、いつでも
身近に生起し得るといふことなのである。

いずれにせよ、既に列挙した幾人もの作家たちに更にアルゼンチンのホルヘ・ルイス・
ボルヘス (Jorge Luis Borges, 1899-1986) なども加えたラテン・アメリカの文人たちは、
夢と現実から成る独自の世界を土着性や神秘性、歴史性豊かな時間と空間の中に構築しつ
つ、「魔術的リアリズム」と呼ばれる冠を授けられたラテン・アメリカ文学の隆盛を導き
出したのである。

4.

ガルシア・マルケスの『百年の孤独』がラテン・アメリカ世界の過去と現在を包含した
一大年代記であるのと同様に、ウィリアム・フォークナーの『アブサロム、アブサロム!』
(1936) もサトペン (Sutpen) 家の悲劇的興亡をダイナミックに描き上げたアメリカ深南

部 (the Deep South) の一大年代記である。ガルシア・マルケスはフォークナーの影響を受けたラテン・アメリカ作家の一人であり、彼が作り上げた架空の村 マコンドはフォークナーのヨクナパトーフア郡ジェファスン (Jefferson, Yoknapatawpha County) を連想させる。また、『族長の秋』などにおける独自の形式は、フォークナーの『アブサロム、アブサロム!』などにおける複数の視点からの独白に通じる手法なのである。

フォークナーの『アブサロム、アブサロム!』は、彼特有のテーマたる南部貴族の没落を描いたものであり (もっとも、サトペン家の当主トマス・サトペン (Thomas Sutpen) は、貧乏白人 (poor white) からの成り上がり者ではある)、南北戦争や人権問題、ミセジェネーションなどを含む南部の歴史的、神話的年代記を写した旧約世界的に深遠壮大な悲劇である。それは幾つかの視点から独白的回想により再構築される「藪の中」的な物語世界である。そこには奇想天涯であからさまな超自然的現象の描写などは見られないが、作者の南部に対する愛憎に揺れる心情を反映した、淀んで停滞した旧約的、更にはギリシヤ悲劇的世界は、「魔術的リアリズム」にいろどられたカリブ的、ラテン・アメリカ的雰囲気底通るところがある。

過去に引きずられ、過去に規制された重苦しい現在を抱えて苦悩し、悲劇的南部神話の奥深い真相に迫ろうと苦闘するフォークナーが彼のミシシッピの地理、風土に類似するところのある現実的現実と幻想的現実がそれぞれ縦糸と横糸となって織り成すカリブ的、ラテン・アメリカ的小宇宙の悲劇、喜劇の実相を解明しようと苦悶するラテン・アメリカ作家たちに少なからぬ示唆やインパクトを与えたのは必然の成り行きであったろう。

実際、ガルシア・マルケス自身も、フォークナーを彼のお手本とみなしていたのである。が、アメリカの学界は、「魔術的リアリズム」なる用語をアメリカ文学に適用することに抵抗しているようである。

近年、もちろん、フォークナーはポスト・モダニズムの作家だと主張されて来ている。我々はそろそろ彼を「魔術的リアリズム」と呼び始めるべきなのだろうか。こうした考えが我々の大部分の者たちに突飛で法外なものと思わせるというまさにその事実が、アメリカ文学そのものについてよりも、アメリカ文学にこの特殊な用語を適用することにアメリカの学界が抵抗しているという事実のほうについて一層多くのことを語っているのは当然のことであろう。そして実際そういうことなのである。他方で、ジョン・バース (John Barth, 1930 -)、彼の多くのテキストが魔術的リアリズムのものとして確かに適格であるバースがボルヘスに対して、また多数のラテン・アメリカの「魔術的リアリズム」作家たちに対して全面的な称賛の意を表明しているという事実があるにもかかわらず、である。「補充の文学」の中でバースは、ガブリエル・ガルシア・マルケスの『百年の孤独』のことを彼にとりポスト・モダニズムの最高のお手本だと公言している。「率直さと手練の総合、リアリズムと魔術と神話の総合」として。だが、この論文とそれの同様に有名な先駆けたる「枯渇の文学」は、ポストモダンという用語の使用を確かなものとするために常に挙げられているに過ぎないのである。アメリカ合衆国の学問が「魔術的リアリズム」なる用語をそれ自身の文学作品に適用することに一層抵抗しているように見えるその理由は、多分、合衆国が我々の戦後社会のすべてのものにとっての最も権威ある中心であり続けて来た、ということにある。

ウィリアム・フォークナーがどちらを向いても「空しい障害物競争ばかり」と嘆いた、善行、悪行、奇行を孕む人の世のあらゆる営み、彼によるその描写作業は形を変えて魔術的リアリストたちに引き継がれたのであり、そうした人間社会の営みの実相を十全に描き出すためには、文字通りのリアリズムの手法だけでは不十分なのであり、そこにホーソンのロマンス論が示唆する方法やフォークナーが工夫を凝らした諸技法などが示すようなイマジネーションや洞察力などが不可欠となるであろう。「魔術的リアリズム」手法の根底には、それがラテン・アメリカ特有の(しばしば不可思議で迷宮的でさえある)風土を背景としているとはいえ、そのような逞しいイマジネーションや深い洞察力が秘められているとみなしてよいのではなかろうか。そうした根源的なところでまずもってフォークナーと「魔術的リアリズム」は必然的にもつながり合っているわけである。

なお、フォークナー同様にヴァイオレンスや人種の葛藤に満ちみちたトニー・モリソンの悲劇的文学世界なども、単なるリアリズムの物差しでは測定出来ないしるものである。

本論を仕上げるに際して、イエール大学(Yale University)のヴェラ・クチンスキー教授(Professor Vera Kutzinski of the Department of English, Director of Graduate Studies)及び同大学のフレッド・C・ロビンソン名誉教授(Professor Fred C. Robinson, The Douglas Tracy Smith Professor of English Emeritus)並びにロビンソン夫人(Mrs. Helen Robinson)に負うところまことに大である。また、『フォークナー・ニューズレター』(The Faulkner Newsletter & Yoknapatawpha Review)の編集長でフリーランス・ライター



イエール大学Yale University (R.P.ウォレン、クリアンス・ブルックスの「ニュー・クリティシズム」、ジャック・デリダの「デコンストラクション」、ウォレン、ブルックスの独創的なフォークナー研究そして今日のハロルド・ブルームの華やかな活躍等数々の斬新な文学批評研究の舞台となった)

そしてNashville House of Booksのオーナーたるウィリアム・ブーザー氏御夫妻（Mr. & Mrs. William Boozer）、ミシシッピ州リップレー公立図書館のジャック・コヴィントン氏（Mr. Jack Covington, Ripley Public Library）作家フォークナーの曾祖父たるウィリアム・フォークナー大佐の研究者、元フィル・ストーン法律事務所（Phill Stone Law Office）フィル・ストーンは作家フォークナーの文学上の指導者 の弁護士トマス・ヘンリー・フリーランド 3 世氏御夫妻（Mr. & Mrs. Thomas Henry Freeland ）及びその御子息で弁護士のトマス・ヘンリー・フリーランド 4 世氏御夫妻（Mr. & Mrs. Thomas Henry Freeland ） とともにフリーランド&フリーランド法律事務所（Law Office of Freeland & Freeland） 、そしてフィル・ストーンの御息女でノースカロライナ州シャーロットのクィーンズ大学（Queen's College）教授アラミンタ・ストーン・ジョンストン女史（Professor Araminta Stone Johnston）のあたたかい御教示に厚く感謝の意を表したい。

イエール大学のスターリング図書館（Sterling Library）、バイネッキ希覓書図書館（Beinecke Rare Book Library）、法学部図書館（Law School Library）のスタッフの方々にも深い謝意を表明したい。

（2002年 5 月）